



知らぬが仏



下品な生物

春日信彦

下品な生物

白いカラスの風来坊は、気の向くまま飛び回って人間社会を観察していたが、最近の若者の異様な行動に驚いていた。色とりどりのカジュアルな服装をした若者たちは、悲鳴のような大声を張り上げ、さらには、意味不明な奇妙な声を張り上げ、蟻の行列のような細く黒い帯を大通りの端っこに作っていた。人間の行動にあまり関心のない天神のカラス仲間たちに尋ねても首を傾げるばかりで、らちが明かなかった。

風来坊は、彼らがいったい何をやっているのか、人のよさそうな学生らしき若者に聞いてみたかったが、“シュウダンテキジエイケン、ハンタ〜イ”という奇妙な発声が、ゴミあさりのカラスは日本から出て行け、という意味ではないかと思えて、ただ、身震いしながら首をかしげて電線から見守る以外になかった。風来坊は、脳裏にピースの愛くるしい笑顔が現れると、緊急事態に遭遇したかのように、すばやく翼を広げ電線からジャンプするように飛び立った。

翌朝、白、赤、ピンク色のコスモスで彩られた平原歴史公園上空にやってくると、金閣寺のようなゴールドの家の小庭に目をやった。いつもならば、最近太り気味のピースは、朝のダイエットぬこ体操を終えて、庭のピンクの丸テーブルの下で居眠りしているのだったが、目を凝らしてみてもどこにも見当たらなかった。風来坊があたりを見回していると公園北側のブルーのベンチに腰掛け、黒猫となにやら真剣に話している赤い首輪をした白いピースの姿を見つけた。

風来坊は、ベンチから5メートルほど離れた大きな山桃の木の枝に飛び降り、白装束の忍者のようにそっと二匹の様子を覗き見することにした。しばらく様子をうかがっていたが、一向に話し終える気配は見え、短気な風来坊は、ふわっと浮き上がると二匹が腰掛けているベンチの背もたれに急降下した。突然、ハトにしては口ばしがバカでかい、醜い白い鳥にピースと黒猫は目を丸くして驚いたが、ピースは、眼を吊り上げいやな顔つきで風来坊に声をかけた。

「何よ、突然。デリカシーがないんだから」睨みつけられた風来坊は、一瞬顔を背けたが、いつものがさつな挨拶をした。「いや、悪い、悪い、ちょっと、ピースさんに聞きたいことがあつてな」ピースは、依然、苦虫をつぶしたような顔をしていたが、黒猫の紹介をすることにした。「こちらは、泣く子も黙る糸島の卑弥呼女王よ。礼儀をわきまえなさい。卑弥呼様、このような無作法なカラスをお許してください。最近、江戸から糸島にやってきた下品なカラスです」ピースは、卑弥呼女王に深々と頭を下げた。

深々と頭を下げたピースを見た風来坊は、上ずった声で話し始めた。「これは失礼いたしました。江戸からやってきました風来坊です。よろしく。まあ、わしは、根っからのがさつものだから、多めに見てくれ。早速だが、最近、若者がわいわい騒いで、アリの行列のように歩き回っているが、あれは、いったいなんじゃ。博学のピースさん」ピースに質問した風来坊は、真ん丸い黒目をぱちくりさせた。

突然の質問を受けたピースであったが、聡明なピースは、即座に返事した。「あれは、デモといって、政府への抗議行動です。まあ、江戸時代の百姓一揆のようなものです。すぐに、鎮圧されますよ」風来坊は、デモという言葉に頭をかしげた。おそらく宣戦布告行動と察した風来坊は、大きくうなずき、あたかも分かったかのような顔つきで話した。「なるほど、ということは、これから、戦争をするんじゃない。人間は、物騒じゃの〜」ピースは、やっぱ、カラスは人間社会を知らないと思い、説明した。

「違います、デモは、戦争じゃありません。むしろ、戦争反対運動です。国家が戦争しないように、若者たちが大声を張り上げているのです。猫の社会と違って、人間社会は戦争が好きなのです。お分かりか？」ピースは、話し終わると卑弥呼女王に顔を向け、うなずいた。「ほ〜、人間は、戦争が好きとな。戦争すると、王様にご褒美でもくれるのか？カラスは、戦争なんかしなくても、うまいものをたらふく食えるがな〜。何せ、カラスは、エサがあるところに、飛んでいけるからな」風来坊は、カラスが地球上で最も温厚で賢い動物と思いこんでいる。

「ま〜、お調子のいいこと。猫も下品な人間がするような戦争なんかいたしませんわ。聡明な卑弥呼女王がいらっしゃる限り、争いなんかありません。共生を重んじる猫の世界では、えさの取り合いなんかないのです。えさがない猫には、ちゃんとえさを与えます。猫は、地球上でもっとも上品な動物ですわよ。カラスさんたちも、猫の上品さを見習うとよろしくて」ピースは、軽蔑の眼差しで風来坊をチラッと見た。

「何をおっしゃる、カラスは、確かに下品ではあるが、心根は優しい。人間のほうが、はるかに下品じゃ。お互い殺しあったり、動物を虐待したり、海や川を汚染したり、まったく、野蛮で下品極まりない。人間に比べたら、カラスは、はるかに上品ですよ。ネコさんたちは、カラスを誤解していらっしゃる。カラスは、お互い助け合う精神を持っているんじゃない。人間こそ、カラスのつめの垢でもせんじて飲むがいい。おそらく、地球上でもっとも下品な動物は、人間だ。まったく、困ったものだ」風来坊は、カラスは人間よりは上品だと主張した。

小さくうなずいたピースは、話し始めた。「確かに、人間は、欲の塊のようなものです。猫の持つ上品な自制心というものが無いのでしょ。とにかく、お金を奪うために、知恵を働かせて、すぐに殺し合いをするのです。猫の世界には、お金はありませんが、ちゃんと幸せに暮らせています。偉そうにしている猫はいないし、いじけている猫もいないのです。みんな、助け合うから、すべての猫は、やさしく、上品になれるのです。人間は、猫の社会を見習えばいいのです」

風来坊は、聡明な発言に感銘した。「さすがですね、ピースさん。人間は、やたらと、建物を作っては壊しているが、まったくわけがわからん。人間の知恵というものは、いい加減なものですな。ところで、卑弥呼様は、人間をどのように思われますか？」風来坊は、黙って聞いていた卑弥呼女王の意見を聞くことにした。卑弥呼女王は、まったく表情を変えず、静かに話し始めた。

「私は、すべての猫を幸せにするために生まれてきた女王です。知恵の多い下品な人間のことは、よく理解できませんが、おそらく、上品な心というものが、生まれたときからないのでしょう。お金を作ったのも、下品な心からに違いありません。下品な心から生まれたものは、下品な社会を作り、下品な争いを引き起こすものです。きっと、地球上に生命が誕生するときに、下品な生物と上品な生物ができたに違いありません。

人間は、地球上でもっとも下品な生物に違いありません。私から見ると、人間は、生命の出来損ないと言えます。下品な心をごまかそうと、人口知能ロボットを使って戦争しているみたいですが、これこそゲスの極みと言っていいでしょう。人間は、下品な生物であり続け、下品な死滅の結末を迎えることでしょう」聖母のような卑弥呼女王は、人間を諭すように、上品な声を響かせた。ピースと風来坊は、宇宙を知り尽くした卑弥呼女王のお言葉に感銘し、拍手を送った。

ピースが卑弥呼女王に帰宅の誘いをかけようとしたとき、南側からキョロキョロと落ち着きのないスパイダーのリールを手にした亜紀の姿が目に入り、ピースは、独り言のように声を発した。「あら、おぼかなスパイダーとおしゃれな亜紀ちゃんだわ」亜紀は、笑顔でベンチに近づいてきた。亜紀は、いつもの軽やかなカワイ～声で呼びかけた。「ピース、こんなところで、遊んでいたの、あら、こちらは？」亜紀は、初めて見かける毛並みがよく気品のある黒猫と目が合った。

一度紹介したいと思っていたピースは、丁重に卑弥呼女王を紹介することにした。「あら、亜紀ちゃん、今日もかわいいわよ。ピンクのパーカージャケットにダークネイビーのデニムスカート、お似合いじゃない。そう、紹介するわね。こちらは、糸島の卑弥呼女王です。私たちの猫の女神様です。亜紀ちゃん、よろしくね。それと、こっちの変な白いカラスは、江戸からやってきた下品な風来坊。こっちも、よろしくね」ピースは、簡単に紹介した。

亜紀は、黒猫が、遠方からやってきた猫なのか、近所の猫なのか気にはなったが、ピースの知り合いであることで、とりあえず仲良くすることにした。上品な身のこなしと知性ある風貌から野良猫ではなさそうに思えた。一瞬、ハトと見間違えた白いカラスは、たまにゴミ袋をつつくときはあったが、人には害を加えそうにないと思い、お友達に加えることにした。

亜紀は、キョロキョロと落ち着きのないスパイダーを紹介することにした。「ちよと、おっちょこちよいのこの犬は、男の子でスパイダーっていうの。少しいたずらが過ぎるんだけど、悪い子じゃないの。仲良くしてあげてね。スパイダー、この方たちと仲良くするのよ」スパイダーは、猫とカラスをキョロキョロと眺めては、クンクンと鼻を鳴らし、返事した。「俺は、スパイダーっていうんだ。名前はクモだけど、血統書つきのシェルティー犬だ。いじめっ子を懲らしめる正義の味方さ。いじめられるようなことがあったら、呼んでくれ、飛んで、助けに行くから」自信過剰のスパイダーは、胸を張って、尻尾を大きく振った。

即座に、ピースはお上手を言った。「あら、スパイダーったら、大人になったのね。頼もしいわ、こちらの卑弥呼女王をお守りしてあげてちょうだい。こんなに頼もしい仲間がいて、とってもうれしいわ」能天気のスパイダーは、お世辞を言われて、尻尾を何度も振って笑顔を作った。スパイダーの上機嫌を察した風来坊は、ゴミあさりの誤解を解くためにスパイダーに話しかけた。

「わしら、カラスは、どうも誤解されている。確かに、ゴミをあさることはあるが、悪気はないんじや。腹が減って、どうにもならんときに、ゴミ袋をつついてしまうんじや。この場を借りて、深くお詫びする。仲間にも、袋をつつかないように言っとくから、許してくれ」風来坊には、かつて、ゴミ袋をつついているときに、スパイダーに追いかけられ、一目散に逃げた苦い経験があった。

スパイダーは、あのとこのことを思い出しドヤ顔で話し始めた。「おしかったな～、もう少しで食べたのに。悪さするやつは、容赦なく食ってやる。世の中には、懲りずに悪さするやつが多いからな～。そういえば、ゴミ袋をかき破ったノラ猫がいたぞ。今度見つけたら、食ってやる」スパイダーは、チラッと黒猫を見た。びっくりしたピースは、弁解がましく口をガタガタさせながら口を動かし始めた。

「それは、よくないことだわ。その猫、きつとお腹がすいていたのね。でも、ノラ猫にしているのは、人間じゃない？責任を持って、エサをやるべきなのよ。悪の根源は、人間にあるのよ。確かに、ノラ猫はよくないけど、ノラ犬は、もっと、たちが悪いんじゃないの」ピースは、スパイダーの顔色をうかがった。スパイダーは、野良犬が子供を追っかけたり、人に吠えたりして、人間に迷惑をかけていることを残念に思っていた。野良犬の悪さを考えると何も言えなかった。

そのとき、即座に、目を吊り上げた亜紀が口を挟んだ。「そうね、猫、犬、蛇、ワニ、亀、アライグマ、ライオン、いろんなペットを飼うのはいいと思うんだけど、責任を持って飼うべきよね。飼えなくなったからとか、嫌いになったからとか、そんないい加減な理由で、山や海に捨てるなんて、絶対許せない。本当に、人間は、身勝手。とつても、亜紀は、人間として悲しい」亜紀は、人間の醜さを指摘され、うつむいてしまった。

風来坊が、ここぞとばかり人間攻撃を開始した。「そうだ、そうだ。人間は、チョ～下品だ。放射性物質なんかをばら撒いたおかげで、俺みたいな変な白いカラスが生まれたし。どうしてくれるんだ。東北と関東では、奇形の鳥、犬、猫、魚、花、人間が、わんさか生まれてやがる。どうなるんだ、ニッポンは。人間の頭は、狂っちまってやがる。人間なんて、クソくらえだ」亜紀は、さらに叱責され、涙がこぼれた。

亜紀の悲しむ姿を見ていた卑弥呼女王は、静かに話し始めた。「風来坊が、言ってることは、もつともです。人間は、生物の共生を考えるべきです。いかなる生物も、健全で平和に生きる権利があるのです。奇形の生物を作り出し、何の反省もしない人間は、生物のクズです。一刻も早く、人間を消滅させるべきです。でも、人間は、知恵があるから、手ごわいのです。人間に勝てる生物は地球上にはいないのでしょうか？」

うつむいて涙を流していた亜紀が、小さな声で話し始めた。「ごめんね、みんな。人間って、本当にだめね。人間は、頭がいいはずなのに、共生ができないのよ。同じ人間として、とっても悲しい。核兵器を作ったり、原発を作ったり、生物に有害なものを作り続けるなんて、人間は、地球のガンだわ。染色体を破壊して、どこが面白いの。遺伝子組換えをやって、有害植物を作ったり。どうして、自分たちがやることが、自殺行為だとわからないのかしら。頭がいい人は、気が狂うのかしら」亜紀は、自分が人間であることが、恥ずかしくなった。

ピースは、亜紀に同情した。「みんな、確かに、人間は、バカで、おろかで、狂気で、救いようがないけど、亜紀ちゃんは、違うの。きっと、亜紀ちゃんは、私たちを守ってくれるわ。亜紀ちゃん、がんばって」亜紀の優しい心を知っているピースは、みんなに訴えた。卑弥呼女王は、小さくうなずいたが、風来坊は、フン、という顔で話し始めた。「人間は、みんな同じだ。いずれ、金儲けに気が狂って、戦争するに決まっている。人間なんて、信用できやしない。みんな、だまされるんじゃないぞ」風来坊は、国会議事堂まで届くような大声をだした。

亜紀の目からは、涙が滝のように流れ落ちていた。ピースは、風来坊をにらみつけ、亜紀を援護した。「みんな、亜紀ちゃんは、違う。みんな、信じて」亜紀は、涙声で話し始めた。「本当に、人間は、どうしようもないほど、バカだと思う。金儲けのために兵器を作り、テロを使って戦争を起こし、何の罪もない子供たちを殺して、本当に、気が狂っているとしか思えない」亜紀は、両手で顔を覆うと顔を左右に何度も振った。

スパイダーがワンとほえ、低い声で威嚇した。「亜紀ちゃんをいじめたら、承知しないぞ。みんな、食っちまうぞ」ピース、卑弥呼女王、風来坊たちは、目を吊り上げた夜叉のような形相のスパイダーを目の当たりにして、凍り付いてしまった。亜紀は、今にも飛びかかりそうなスパイダーをなだめ、しっかりと抱きしめた。「みんなは、悪くないの。悪いのは、人間のほうなの。ありがとう、スパイダー」

少し言い過ぎたと思ったのか、風来坊がご機嫌を取るように話し始めた。「人間は、バカだ。でも、亜紀ちゃんのような優しい人間もいるから、地球も救われるんじゃないか。みんな、亜紀ちゃんを応援しようじゃないか」ピースもうなずき、声を張り上げた。「そうよ、亜紀ちゃんは、生物の宝よ。亜紀ちゃんと一緒に、人間の下品な心を矯正しよう」卑弥呼女王が、大きくうなずいた。

うわさ

世界各国をまたにかけて飛び回る渡り鳥の仲間たちからいろんな情報を手に入れている地獄耳の風来坊は、大きな黒目をギョロギョロさせて、みんなに問いかけるように話し始めた。「ところで、東京オリンピックのうわさを知ってるか？東京オリンピックをボイコットする国が増えているそうだ。このままじゃ、もしかすると、東京オリンピックは、おじゃんになるかも知れんぞ」

亜紀もそんなうわさを耳にしたことがあった。「そうなのよ、いったいどうなるのかしら。利根川も、東京湾も、ダムも、地下水も、大気も、東京はすでに放射性物質に汚染されているみたいね。毎日、福島原発から、放射性物質が海や地下水に流れ込んでいるらしいわ。だから、これから、ますます、東京は汚染されるはずだわ。でも、政府は、そのことをニュースで報道しないのよ。なぜかしら。一刻も早く、みんなに教えてあげないと、大変なことになるのに。そんな東京でオリンピックを開催するなんて、無茶苦茶よ」

スパイダーも亜紀の意見に同感だった。「人間は、犬よりバカだ。犬たちも、東北、関東から逃げ出しているというのに」ピースが、不安げな顔で話し始めた。「オリンピックは、東京以外にできないのかしら？もう、ておくれかしら」亜紀が、うなずきながら同感するように話し始めた。「そうね、福岡がいいんじゃない。ヤフードームもあるし。熊本、大分、佐賀などの競技場も使えば、どうにかなるんじゃない。政府は、のんきなものね。世界各国は、日本は放射能汚染国だとはっきり公言しているのに、何にも気にならないのかしら。信じらんない」

風来坊は、ブルブルと顔を左右に激しく振り、甲高い声で話し始めた。「福岡は、ダメだ。そんなことをすれば、東京の放射能汚染が明るみに出て、東京は大パニックだ。東京に大地震が起きたときよりも、大惨事だ。東北、関東から九州への民族大移動が起きたらどうなる。こうなれば、日本の文化も産業も、崩壊だ」あまりにも大胆な発言に亜紀は、度肝を抜かれたが、近い将来、東京の放射能汚染がばれて、東京に大パニックが起きるように思えた。

ピースも風来坊の言っていることがなんとなく分かるような気がした。放射能汚染をくい止めることができなければ、嘘を突き通すほうが、日本のためのように思えた。「きっと、政府はあらかじめ、世界中から集まってくる人たちに、放射性物質をたくさん吸い込んでもらって、世界中を放射能で汚染するつもりなのよ。みんなでガンになれば、怖くない、ってやつよ。人間は、やっぱ、バカってこと」

風来坊は翼をパタパタさせて、ピースに笑顔を向けた。「人間は、放射能で死んでしまえ。でも、九州には、放射能を持ってくるんじゃないぞ。最近、九州の人口が増えているが、困ったものだ。こうなったら、九州を日本から分離して、アメリカ合衆国の州に加えてもらわねば。アホな日本政府はほっといて、九州独立じゃ」亜紀は、風来坊の意見は、現実離れしていると思ったが、そのように思っている人間もいるんじゃないかと思った。

さらに、風来坊は、ドヤ顔で話を続けた。「やっぱ、東京がヤバイと思ったのか、核研究施設をT大から、九州のQ大に移すつもりじゃ。CIAは、何をやるにも、すばい。極秘に、Q大とF大にかなりの資金が流れているみたいじゃ。ということは、今後は、Q大とF大が、CIAの拠点となるということじゃ。とにもかくにも、一刻も早く、九州をアメリカの州にしてもらいたいものじゃ。本州の放射能汚染は、時間の問題だからな。みんなも、そう思わんかの〜」

スパイダーが、ワン、と大きな声を上げた。「こら、そんなでたらめなうわさをグダグダしゃべるんじゃね〜。確かに、東北、関東は、汚染されているが、政府は、問題ないと言ってるじゃないか。政府を信じればいいんだ。信じれば、救われるんだ。日本は、腐っても、汚染されても、日本だ。アメリカになんかと一緒にされては、たまったもんじゃない。アメリカの州になったら、野蛮なアメリカの犬が乗り込んでくるんだぞ。アメリカの州になるなんて、ごめんこうむる」

風来坊は、アホな犬がほざいていると心であざ笑った。「まあ、野蛮な犬がやってくるぐらいはいいが、浮浪者がやってくるのはごめんこうむりたい。日本でも、アメリカのように浮浪者が急増している。俺たちの食べ物まで、やつらに取られるしまつだ。いったい、日本の福祉はどうなっとるんじゃ。人間が、カラスのエサまで食うようになっちゃ、世も末じゃ。しかも、公園で気持ちよさそうに寝ているやつがいたから、起こしてやろうと、突っついてやったら、死んでやんの。人間の肉はまずいが、腹がすいていたから、少々、食ってやった」

ピースは、カラスは下品極まりないと軽蔑の眼差しを向けた。一方、最近の日本は、貧乏になったと痛感していた。捨て猫や捨て犬が氾濫し、保健所の保管所も満杯で、もはや、捨てられたペットを捕獲しなくなっていた。まだ、自分を含め捨てられずにいるペットたちは、幸せだと思った。「そうね、エサをもらえる私たちは、幸せ者ね。やさしい、亜紀ちゃんのおかげだわ。それにしても、人工知能と言う得たいの知れないものができたおかげで、ロボペットが増えて、気味が悪いわ。このままだと、生きたペットは、みんな抹殺されちゃうんじゃないかしら。恐ろしいわ」

亜紀は、すかさずピースたちを安心させようと言葉を投げかけた。「みんな、安心して。亜紀は、みんなを守って見せる。人間って、本当にバカよ。多くのペットを抹殺するなんて。さらに、ロボペットまで作るなんて。きっと、バチが当たるに決まってる」ワン、ワン、とスパイダーがほえた。「俺は、見たんだ。金持ちの犬は、最高級の牛肉を食べさせてもらっているんだ。犬に牛肉を食わせるだけの金があるんだったら、死にかけている浮浪者に牛肉をめぐんでやればいいんだ。まったく、人間とやらは、頭が変なんじゃないか」

風来坊が声たからかに話し始めた。「もはや、日本はおしまいだ。きっぱりと、アホな日本を捨てて、九州をアメリカの州にしてもらうことだ。カラスにとっては、政府はどこでもいいんじゃない。アメリカであろうが、日本であろうが。犬も猫も、きっと、アメリカのほうが幸せに暮らせるに決まっている。みんな、CIAに協力しようじゃないか。亜紀ちゃん、将来、CIAになるといい」

スパイダーが即座に喧嘩を売った。「おい、カラスは、いつから日本の敵になった。風来坊は、CIAのスパイなのか。まったく、けしからん。お前なんか、食っちまうぞ。覚悟しろ」飛びかろうとしたスパイダーを亜紀は取り押さえた。「コラ、ダメ、冷静になるのよ。風来坊が、言っていることも一理あるわ。亜紀は、将来、アメリカ空軍のパイロットになるつもり。そして、日本とアメリカを守ってあげる。みんなもよ」

スパイダーは、亜紀をじっと見上げ、うなずいた。「亜紀ちゃんが、そういうのだったら、しょうがない。この際、風来坊の意見を認めてやる。亜紀ちゃんが、パイロットか、かっこいいだろうな〜」風来坊は、大ききうなずき、またもやドヤ顔で話し始めた。「九州の空軍は、日本最強じゃないか。アメリカの州になれば、世界最強になる。亜紀ちゃん、立派なパイロットになって、九州を守ってくれ。応援するからな」

亜紀は、大ききうなずきドヤ顔になったが、すぐに悲しそうな表情に変わった。「でも、やっぱり、放射能汚染が心配ね。このままだと、九州も汚染されるわね。どうにかならないのかしら？」ここぞとばかりに風来坊は、声を張り上げた。「そう思うだろ〜、みんなも。九州が汚染されないためには、九州を移動させる以外ないな。まあ、これは、できっこないんだが」

それを聞いていたピースは、また、アホなことを言ってると思い、ニャ～ニャ～と小さな声で笑い、解決策を話した。「だから、今後、東北と関東の農産物や海産物を九州に持ち込まないことよ。九州に必要な農産物と海産物は、すべてアメリカから輸入すればいいのよ。簡単なことじゃない」ピースは、アメリカから輸入される農産物の多くは、遺伝子組み換えであることをよく知らなかった。

亜紀が、あきれた顔で話し始めた。「動物は、気楽なものね。人間の付き合いって、そう簡単なものじゃないのよ。やっぱ、農業や漁業で働いている人たちのためにも、九州には、東北と関東の生産物も仕入れなければならない、お付き合いってものがあるのよ。そんな、動物の浅知恵では、解決できるものじゃないの。でも、関東と東北の農産物と海産物は、汚染されているわけでしょ。いずれ、汚染された野菜や魚は、誰も買わなくなるわね。このままじゃ、関東と東北の農業や漁業をやっている人たちは、どうなるのかしら。かわいそうになってきた」

風来坊が、名案が浮かんだといわんばかりのドヤ顔で話し始めた。「アホな人間に代わって、知恵を授けてあげよう。九州の南に人工島を作るんじゃ。そして、その人工島に、東北、関東の人たちを移住させるんじゃ。明暗じゃろ」ピースは、一瞬微笑んだ。「あら、たまには、気の利いたことを言うじゃない。それは名案よ、亜紀ちゃんは、どう思う？」亜紀は、確かに名案だと思ったが、人工島なんて、そう簡単にできっこないと思った。

「まあ、カラスにしては、まあ、まあ、の意見だわ。でも、人工島なんて、そう簡単にできるものじゃないのよ。実現可能な意見じゃないと、人間の世界ではバカにされるだけよ」風来坊は、ムカついた表情で、亜紀をにらみつけた。腕組みをした風来坊は、だみ声で尋ねた。「それじゃ、亜紀ちゃんの名案を言ってみなよ、さあ、さあ。言ってみなよ。人間とやらの名案を聞いてやるからさ」

急に振られた亜紀は、一瞬固まってしまったが、以前から思っていた考えを話すことにした。「原発の放射の汚染は、永遠に続くはずね。だから、このままでは、東北と関東の人たちは、いずれ、内部被曝するの。彼らを救うには、東北と関東を捨てさせて、北海道と京都より西側の近畿、中国、四国、九州、沖縄、に移民させるのが一番いいと思う。首都も東京から福岡に移せば良いと思う。これだったら、実現可能と思うの。これでも、パニックになるような気がするけど」

風来坊は、いまひとつ納得がいかない顔で話し始めた。「まあ、それが妥当な線かも知れんな。カラスは国会議員じゃないし、官僚でもない。まあ、人間は、カラスがどんなにいいアドバイスをしたとしても、聞き入れるような動物じゃない。人間が蒔いた種は、人間の手で刈り取ってもらわんとな。カラスは、人間に頼らなくても生きていけるけど、猫と犬は、人間と一緒にガンになる以外ないようだな。かわいそうな動物じゃの〜」

亜紀が、コクンとうなじを垂れた時、亜紀、亜紀、と叫ぶ大きな声が南側から響いてきた。ジーンズ姿のアンナが近づいてくると風来坊、ピース、卑弥呼女王たちは、逃げるように消え去った。「亜紀、何してるの、彼氏が来てるわよ。早く、帰ってらっしゃい」アンナは、ベンチから飛び立った白いカラスを怪訝そうに見ていると、大きく左右に尻尾を振りながら笑顔満面のスパイダーが、アンナの太ももに飛びついた。

自称彼氏

亜紀とスパイダーが自宅に戻ると亜紀の男子友達、東条秀樹がキッチンのテーブルで背筋をびんと伸ばして待っていた。スパイダーは、玄関横にある足洗い場できれいに足を洗うと亜紀と一緒にキッチンに歩いて行った。亜紀は、少し苦手な秀樹に挨拶した。「秀樹君、こんにちは。早く来たのね。午後からか、と思っていた」秀樹は、即座に笑顔で答えた。「いや、土曜の午前中やってくる英会話の先生が、突然、来れなくなって、だから、午前中に来たってわけ。一刻も早く、亜紀に会いたくてさ。お邪魔だったかな」

いつも気取った話し方をする秀樹は、9月に東京の名門お坊ちやま小学校から転校してきた男子で、どちらかといえば、学校でも話しかけられたくない男子だったが、どこが気に入られたのか、最近、亜紀の自宅まで押しかけてくるようになっていた。「ちょっと、犬の散歩に出かけていたの。この子、スパイダーって言うの。スパイダー、挨拶は」スパイダーは、ワンとほえて、尻尾をワイパーのように元気よく振った。

愛想のいい犬を見た秀樹は、とりあえずお世辞を言った。「毛並みのいい犬じゃないか。血統書つきのワンちゃんみたいだね」亜紀は、スパイダーがほめられて、うれしくなった。「とっても、おりこうさんで、家族の一員なの。秀樹君もペット飼っているの？」秀樹は、爬虫類が好きで、蛇と亀を飼っていた。「僕は、蛇と亀を飼っている。かわいいんだ。一度遊びにおいでよ。抱っこさせてあげるから」

亜紀は、蛇と聞いて鳥肌が立った。「え、蛇、蛇って、嘔み付かないの？」秀樹は、ケラケラと笑って答えた。「かまないさ。本当にかわいいんだ。じっと顔を見つめっていると、長い舌を出して笑顔を作るんだ」亜紀には信じられないような話で、なんとなく秀樹が気味悪くなった。次第にブルーになった亜紀は話を変えることにした。昨日の自由学習のとき“将来やりたい仕事”についての作文の発表が行われた。そのとき、世界一のCIAになりたいと教壇の前で話していたドヤ顔の秀樹の姿を思い出し、そのことについて質問することにした。

「秀樹君、秀樹君は、将来CIAになりたいって、言ってたでしょ。CIAって、どんな仕事なの？」突然の話題転換に面食らった秀樹だったが、CIAについて聞かれたことで、愉快になった。「あ～、僕の夢ね。CIAって、ほとんど知られてないから、みんなきよとんとしてたけど、簡単に言えば、大統領の手足となって働くことなんだ。でも、大統領よりもすごいんだ。表には現れない仕事をやっていて、逆に、大統領の意思決定までもやってしまう重要な仕事なんだ。まあ、大統領を動かす仕事ってとこかな。名誉ある仕事さ」

子供らしくないドヤ顔の秀樹を見ているとますます気味が悪くなった。「そうなの。大変な仕事みただけで、それって、頭が良くないとできない仕事じゃない。秀樹君にできるの？」頭が悪いみたいに言われた秀樹は、ムカついた。「確かに、頭脳明晰じゃいとなれないんだ。しっかり勉強して、必ずなって見せるさ。そうだ。亜紀ちゃんこそ、CIAになればいいじゃないか。IQ180もあるんだから」

8歳のIQテストで、亜紀は、なんと、180もあった。CIA主催のIQテストは、優秀な生徒を選抜して行われた。だが、優秀な生徒が、特待生でアメリカに留学するという出来事に疑問を抱く教育評論家たちは、日本の国立大学でも特待生制度を採用するように政府に訴えていた。大企業もアメリカへの知能流出を防ごうと高額な報酬を約束し、アメリカへの就職を阻止する施策を打ち出していた。

CIAは、IQ150以上の生徒のマイナンバーを登録し、極秘に追跡調査を行っていた。このような優秀な人材の極秘調査は、かつてから行われていたが、近年、CIAは、世界中の優秀な子供たちを獲得する動きを見せていた。このことから、人工知能の研究を推進しているロシア、中国、ルーマニア、インド、シンガポールなどの各国は、CIAへの警戒を強化し始めた。

「え、亜紀が、CIA。とんでもないわ。私は、パイロットになりたいの。この前、発表したじゃない。聞いてなかったの」亜紀は、ふくれっつらをして、秀樹をにらみつけた。びっくりした秀樹は、即座に弁解した。「分かってるさ。亜紀が、米軍戦闘機のパイロットになりたいって言ったことぐらい。でも、パイロットというのは、バカがやることじゃないか。今の戦闘機は、人口知能搭載で、無人なんだぜ。人間パイロットは、情報収集のための実験に使われるモルモットじゃないか、そんなモルモットパイロットになるのかよ」

パイロットはモルモットと言われ、亜紀の夢が侮辱されたようでムカついた。「そんなことぐらい知っているわよ。それでも、戦闘機を操縦したいのよ。秀樹君には、亜紀の気持なんか分からないわよ、フン」亜紀は、顔をそむけて、スパイダーを見つめ同意を求めた。スパイダーは、亜紀に同意して、ワンとほえた。秀樹は、さらに追い討ちをかけた。「へ～、変わってんの。頭がいいんだから、戦闘機の開発をやればいいじゃないか。犬死するモルモットになるよか、よっぽどましじゃないか」

亜紀は、戦闘機に乗るのが夢だった。自分の操縦する戦闘機で、日本を守りたいと思っていた。でも、ほとんどの戦闘機は、人工知能で操作されていて、人が操縦するよりも高度な操作が可能となっていた。それでも、亜紀は、自分の手で戦闘機を操縦したかった。現実と逆行するような夢に愚かさを感じたが、それでも、戦闘機を操縦する自分の姿が脳裏から離れなかった。「とにかく、亜紀は、パイロットになるんだから、グダグダ余計なことを言わないでよ。お互い、自分の夢を追いかければいいじゃないの」

怒らせてしまったことに気づいた秀樹は、即座に機嫌をとった。「ちょっと、僕の言い方が良くなかったと思う。亜紀が優秀だから、研究の道を勧めたんだ。亜紀の夢にケチをつける気持は毛頭ないんだ。僕は、亜紀に危険な仕事をしてほしくないんだ。女子は、危なくない安全な仕事を選んだほうがいいんじゃないかと思っただけさ。分かってくれよ。亜紀のことを思って、言っただけだから」

今にも泣出しそうな顔の秀樹は、頭を何度もぺこぺこさせては、謝った。亜紀は、何度も頭を下げて謝る秀樹を見て、いったい何しにやってきたのだろうとあきれてしまった。「秀樹君、そんなに謝ることじゃないわよ。気にしないで。秀樹君は、優秀だし、立派なCIAになれると思うわよ。お互い、がんばりましょ」その言葉を聞いて、秀樹のしかめっ面がぱっと笑顔になった。

「そうだよな、お互いがんばればいいんだよな。やっぱ、亜紀は、優しいな。ところで、女子って、どんな男子が好きなんだろう？金持ちで、スポーツができて、頭がいい男子？僕は、サッカーが得意だし、頭もいいほうだから、理想の男子ってことかな」秀樹は、異様な笑顔を作り、亜紀を見つめてちよっとうなずいた。何を言いたいのだろうかと思っただけが、適当にお上手を言うことにした。

「秀樹君は、大金持ちが通うお坊ちやま学校から転校してきたんでしょ。センスもいいし、おしやれだし、物知りだし、スポーツも得意だし、イケメンだし、女子の人気者よ。おぼっちやま学校でも、モテたんじゃない」真に受けた秀樹は、亜紀に好かれたのだと思い、有頂天になって話し始めた。「やっぱ、女子は、金持ちが好きなんだね。パパは、桂コーポレーショングループのIT企業の重役だし、まあ、金持ちって、ことかな。亜紀も金持ちが好きだよな」

いつもの自慢が始まったと思った亜紀は、一刻も早く追いつく作戦に出た。仲良しの昌子のことを思い出して、昌子を押し付けることにした。「まあ、貧乏よりは、お金があったほうがいいけど、別に大金持ちじゃなくてもいいわ。秀樹君には、金持ちの女子が似合ってるみたいね。あ、そう、昌子ちゃん、お父様が、銀行の頭取って言ってた。昌子は、秀樹君のこと好きみたいよ」

秀樹は、亜紀が金持ちを毛嫌いしているようで、なんと言って機嫌をとればいいのか戸惑ってしまった。「あ、そうだね。お金のことはどうでもいいことさ。亜紀は、どんなタイプの男子が好きなんだい」ずばり好きなタイプを聞かれ、返事に困ったが、秀樹に当てはまらないようなタイプを言うことにした。「そうね、スポーツマンで、やさしくて、明るくて、謙虚で、口数が少なく、顔はまあまあで、気配りのある男子がいいな」

秀樹は、顔をしかめた。スポーツマンは、当てはまっていたが、謙虚と口数が少ないというのは、まったく当てはまらなかった。秀樹が、黙ってうつむいていると家庭菜園をやっているアンナが、家の北側にある小さな畑から取れたピーマンとナスを持って戻ってきた。「秀樹君、お昼は、ハンバーグでいいかしら」秀樹は、母親の機嫌をとって、亜紀に気に入られる作戦に出た。「はい、ハンバーグは、大好きです。お母様の手作りですか？」

アンナは、ハンバーグの作り方を最近覚えたばかりだったが、亜紀たちの評判は良かった。「そうなの。手によりをかけて作るから、食べてみてちょうだい」秀樹は、ここぞとばかりお上手を言うことにした。「お母様の手料理だなんて、最高です。ワクワクします。お母様は、お美しく、お料理も上手なんですね。やっぱ、亜紀姫のお母様ですね」秀樹は、もっとほめたかったが、これ以上ほめ言葉が頭に浮かばなかった。

お美しいと言われ、能天気のアンナは、有頂天になった。「そう、言ってくれると、うれしいわ。きのうから下ごしらえは、やってるから、12時過ぎには、出来上がるわよ。待っててね」アンナは、ハンバーグとサラダとコーンスープを作る準備に入った。亜紀は、おべんちゃらを平然とした顔で言った秀樹の豹変にびっくりしたが、それ以上に、それを真に受けた能天気のアンナにあきれ返った。

秀樹には、アンナを見るたびに呼び起こされる疑問があった。それは、亜紀がアンナとあまりにも似ていないことであった。また、亜紀がお父さんのことをまったく話さないことも気にかかっていた。そのことに関しては、なんとなく聞いてはいけないことのように思え、話題にしてこなかったが、ちょっとだけ聞いてみたくなった。もし、亜紀がいやな顔をすれば、即座に話を変えて機嫌をとることにした。

秀樹は、アンナに聞こえないように小さな声で質問した。「あのさ、亜紀ちゃんが、頭がいいのは分かるんだけど、それって、お母さん遺伝なの？お母さんって、学校の先生をなされてたの？」亜紀は、一瞬固まってしまった。というのも、アンナの若いころをまったく知らなかったからだ。質問されて始めて、そのことに気づいた。「え、ママ。ママは、お団子屋をやっているけど」

父親についても聞いてみたくなった。「お父さんは？」亜紀は、しばらく言葉が出なかった。実の両親のことを思い出したが、そのことは誰にも話したくなかった。とりあえず、育ての父親のことを話すことにした。「お父さんは、数学の先生だった。でも、2年前に原因不明の病気で亡くなったの」秀樹は、やっと、亜紀のなぞが解けたように思えた。「でも、亜紀には、優しくて、美人のお母さんがいるから、良かったね」

亜紀は、家族のことを友達には話したくなかった。実父と実母は失踪し、実弟は餓死したことを思い出したくなかったからだ。突然、亜紀は、うつむいてしまった。亜紀は、暗闇の世界に一人取り残されたような気持ちになってしまった。やっぱ、家族のことを聞くべきではなかったと感じ取った秀樹は、つくり笑顔でペットの話をすることにした。「そういえば、毛並みのいい、ちょっと気取った猫がいないね。名前、何と言ったっけ」

亜紀の耳に猫という言葉が飛び込んできて、ぱっと笑顔が浮かんだ。「ピースね。時々、お散歩に出かけるのよ。夜遅く帰ってくることもあるの。ほんと、気まぐれなんだから。今朝、黒猫のお友達が来たみたいで、一緒に、遊びに行ってるみたい」明るい声で話し始めた亜紀を見て、秀樹はほっとした。秀樹は、家族の話避けようと、次は、スポーツの話をすることにした。

「亜紀は、どんなスポーツが得意なの？僕は、サッカーチームに所属しているんだ。すごく楽しい」亜紀は、スポーツは、好きではなかった。外であまり遊ばない亜紀を見かねて、アンナは、時々ゴルフの打ちっぱなしに連れて行っていた。「そうね、あまり体育は、好きじゃないの。運動オンチなのかも。スポーツってわけじゃないけど、ママに誘われて、ゴルフ練習場に時々行くくらい」

ゴルフと聞いて、地獄耳のアンナがキッチンから叫んだ。「ゴルフは、楽しいわよ。秀樹君もやってみたら」秀樹は、これはチャンスと大きな声で返事した。「はい、一度やってみたいと思っていました。お母様、ぜひ教えてください。お母様は、スポーツがお得意なんですね」ほめられてますます上機嫌になったアンナは、能天気な声で返事した。「いいわよ。食事が終わったら、ちょっと練習場に行ってみる？」

秀樹は、亜紀と一緒に練習できると思って、元気よく返事した。「はい、亜紀と一緒に練習できるなんて、夢見たいです。待ちどうしいな～」亜紀は、できれば、早く秀樹を追い返したかったが、一緒に練習する羽目になり、ガクツと落ち込んでしまった。「ママ、ゴルフの練習、これからも続けるの？亜紀には、向いてないと思うんだけど。ママと秀樹君だけで、練習やったら」

その弱気な言葉を聞いたアンナは、スリッパをパタパタさせて、テーブルに飛んでやってきた。「ナニ、ナニ言ってるの。亜紀は、かなり筋がいいわ。最初からボールを打てるなんて、きっと才能があるってことよ。がんばりなさい」動かないボールを打つゴルフをいたって簡単に思った秀樹は、自分の運動神経を自慢し始めた。「僕は、結構、運動神経がいいんです。サッカーでも、センターフォワードのポイントゲッターなんです。すぐに、亜紀に追いついて見せます。亜紀、一緒に頑張ろうよ」

アンナは、笑顔を作り励ました。「いいじゃない。二人とも、お互い切磋琢磨して、頑張るのよ。スポーツは、なんと言っても、体作りからよ。牛肉100パーセントのハンバーグ、できたわよ。しっかり食べて、練習に行きましょう。亜紀、女子も強くたくましくならないと、日本を守れないわよ」落ち込んでしまった亜紀が気にかかり、亜紀に言葉をかけた。「亜紀ちゃん、僕と一緒にいたいんじゃない。嫌われているのかな〜」

亜紀は、本当にゴルフの練習が嫌いで行きたくないと言ったことが、秀樹が嫌いと言っていたようで、なんとなく気まずくなってしまった。「秀樹君が嫌いでそう言ったんじゃないわ。ゴルフの練習が嫌だからそう言ったまでなの。秀樹君、気にしないで」その言葉を聞いた秀樹は、ほっとした。かなり勘違いしてしまった秀樹は、有頂天になって話し始めた。「お母様、僕、頑張ります。これから、時々、練習に連れて行ってくださいますか。亜紀と一緒に、頑張りたいんです」

アンナは、ゴルフにやる気を示した秀樹が、猛烈に気に入ってしまった。「そう〜こなくっちゃ。いいわよ。ビシバシ、鍛えてやるわ。亜紀も、秀樹君に負けないように頑張るなさい」秀樹は、アンナが亜紀と違って、アウトドア派であることに気づき、もっと、趣味について質問することにした。「お母様は、スポーツがお得意でいらっしゃるんですね。ほかには、どんな趣味がありますか？」

秀樹を気に入ったアンナは、少女のような軽やかな声で返事した。「そうね、水泳にテニス、なんと言っても、モータースポーツね。車もバイクも乗りまわすわよ。サーキットでも走るんだから」サーキットと聞いた秀樹は、おとなしい亜紀とまったく違う母親に、目を丸くした。「へ～、すごいんですね。どんな車に乗られているんですか？」待ってましたとばかり、アンナは、ドヤ顔で返事した。「サーキットでは、ホンダ・S2000。買い物は、BMW。ゴルフに行くときは、ベンツ。ツーリングは、ヤマハ・FJR1300。若いころからモータースポーツが趣味なの」

何台もの車とバイクを持っていることを聞かされて、仰天してしまった。「そんなにたくさん、車とバイクをお持ちなんですか。スタイル抜群のお母様は、パワフルウーマンなんですね」アンナは、秀樹がますます気に入り、自分の子供のように思えてきた。「いつか、オートポリスに連れて行ってあげるわね。きっと、感動するから。楽しみにしてるといいわ」秀樹は、母親に気に入られて、亜紀にますます急接近できたように思えた。

謎のおじいちゃん

秀樹は、亜紀の家庭が不思議に思えてきた。母親は、お団子屋をやっているに過ぎないはずなのに、BMWとベンツの高級な車を持っていた。お団子屋って、そんなに儲かるのだろうかと思った。どう考えても、お団子屋ぐらいで高級車が買えるとは到底考えられなかった。ふと頭に浮かんだのが、生命保険金だった。父親の死亡保険金で高級車を買ったのではないだろうかと一瞬思ってみたが、やはり、それは違うように思えた。

そんなことを考えていると、なんとなく、モヤモヤが膨らんで、イライラし始めた。秀樹は、母親に気に入られたことだし、この程度のお金の質問をしても嫌がられないように思えた。食事を終えて、アンナが食洗機に食器を並べ始めたのを見届け、小さな声で質問した。「亜紀ちゃん、お団子屋って、儲かるんだね。お母さん、高級車を持ってるし」その質問に、亜紀はなんと言っ
て答えていいか戸惑ってしまった。お団子屋は、赤字がでない程度で、まったく儲かっていなか
ったからだ。

「え、お団子屋。お団子屋は、ママの趣味なの。まったく儲かってないみたい。ママの高級車は、おじいちゃんからのプレゼントなのよ。おじいちゃんは、ビルゲイツより金持ちなんだって。まだ、会ったことはないんだけど」亜紀は、おじいちゃんのことをつい口に出してしまった。ビルゲイツより金持ちと聞いた秀樹は、飛び上がってしまった。目を大きく見開いた秀樹は、泡を吹きながら尋ねた。「おじいちゃんって、誰なのさ。ビルゲイツより金持ちって」

ビルゲイツより金持ちと言ったのは、さやかだった。だから、おじいちゃんが、誰なのかはまったく分からなかった。「そういわれても、会ったこともないし、さやかお姉ちゃんが、そう言
ってた、だけだから・・・」返事に困った亜紀は、アンナに聞いてみることにした。大声でアンナを呼んだ。「ママ、ちょっと、こっちに来て」トイレにいたアンナは、亜紀の大きな声に目を丸くして、すばやく手を洗うと笑顔でテーブルにかけてきた。

アンナは、亜紀の右横に腰掛け、亜紀に眼をやった。「はい、ロケットのごとく、飛んできましたよ。何でしょうか？」亜紀は、早速質問した。「ね～、おじいちゃんって、大金持ちなんでしょ。どんな人？さやかお姉ちゃんが、ビルゲイツより金持ちって言ってたけど。あのBMWとベンツは、おじいちゃんのプレゼントよね。時々、高級車でやってくる燕尾服のおじさんは、おじいちゃんの召使でしょ」

ビルゲイツより金持ち、と聞いて、アンナは噴出すように笑った。笑いをこらえながら、アンナは返事した。「ビルゲイツより金持ちって、さやかが言ったの。まったく、冗談が過ぎるんだから。パパは、確かに金持ちだと思うけど、単なる、おせっかい焼きの老人って感じね。高級車は、要らないって言ったのに、もってくるんだもの。困ったものだわ」

秀樹は、ビルゲイツより金持ちというぐらいだから、もしかしたら、有名な金持ちじゃないかと思った。「どんな方なんですか？有名な方ですか？」アンナは、ちょっと返事に戸惑った。IT企業の会長とだけは、さやかから知らされていたが、それ以上のことは分からなかった。「どんな方っていわれてもね～、何と言っていいのかしら。大企業の会長とでも、言えばいいのかしら」

秀樹は、ちょっと首をかしげて、思い当たる人物を考えてみた。ビルゲイツよりも大金持ちで、有名な人といえば、・・「もしかして、そのかたは、陰で世界を動かしているとうわさの、桂小五郎じゃないですか」その質問に、一瞬息が詰まった。確かに、さやかが桂って言っていたようでもあったが、はっきりしなかったからだ。また、アンナは、そのことを確かめたわけではなく、どうでもいいことだと思っていた。それかといって、自分の父親のことを知らないというのも変なように思えて、話をあわせておくことにした。

「そうね、桂会長と言ってたかしら」秀樹は、その言葉を聞いて悲鳴を上げた。「ヒェ～～、ほんとですか。あの、あの、カツラ」秀樹は、あまりの驚きに声が脳天から飛び出した。アンナは、桂会長が世界的に有名な人だとは知らなかった。アンナは、適当に話を作った。「あら、そんなにびっくりするほどの人だとは思わないんだけど。単なる、人のいい老人よ。めったに会わないし、あまり、人と会うのは好きじゃないみたいだわ」

秀樹は、桂会長の奇妙なうわさを父親から聞かされていた。桂会長は、誰も過去の素性を知らない陰の権力者で、まったくといっていいほど人と面会しない謎の人物であることを。「いったいどうして？大金持ちのご息女が、こんなド田舎の糸島に？信じらんない」アンナは、父親の話が事件のようになるとは、面食らってしまった。確かに、大金持ちの子供だったら、こんなド田舎で暮らさないと思えた。

「そんなにびっくりしないでよ。ド田舎が好きだから、糸島で暮らしているだけだから。秀樹君も、糸島に引っ越してきたら？とっても空気がきれいで、人も親切な人ばかりで、住みやすいところよ」桂会長の話は事実と思い込んだ秀樹は、アンナが総理大臣のように思えてきた。あごはガタガタ震え、気絶しそうなほど意識が朦朧となってきた。あごがガタガタ震えだしたのには、わけがあった。

それは、桂コーポレーション出資の軍事企業が、化学兵器、核兵器、気象兵器を製造し、世界各国に売っているということを父親から聞かされていたからだ。しかも、彼に逆らうものは、暗殺されるということも聞かされていたからだった。秀樹の父親は、桂コーポレーショングループのIT企業の重役だが、いまだ、桂会長の顔を見たことがないと言っていたのを思い出した。

「亜紀姫のおじい様は、大金持ちなんですね。それから比べたら、僕んちは、貧乏人ですね。ワハハハハ」秀樹の顔は引きつり、全身固まってしまった。亜紀は、秀樹の豹変が理解できなかった。金持ちということだけで、そんなにびっくりすることだとは、思えなかったからだ。「秀樹君のほうが、きっと、金持ちよ。いつか、おじいちゃんのうちに遊びに行きたいと思っているの。ママ、いつ、おじいちゃんのところに連れて行ってくれるの。秀樹君も一緒に連れて行ってよ」

秀樹は、気絶しそうになった。万が一、桂会長に気いられなかったら、二度と生きて帰られなくなるんじゃないかと思えて、全身が震えだした。「ボ、ボクハ、いいです。そんな、大金持ちとは、お会できません。僕は、貧乏人ですから。もう帰らせていただきます。ハンバーグ、ご馳走様でした。亜紀姫、これからもよろしく。それじゃ」秀樹は、すっと立ち上がり、夢遊病にかかったようにぼんやりと歩き出した。